名探偵コナン new

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン　ｎｅｗ

【Ｎコード】

Ｎ８７２８Ｂ

【作者名】

桂　ヒナギク

【あらすじ】

主人公がオリジナルキャラの名探偵コナン。――更新不定期

＋＋プロローグ＋＋

北海道、苫小牧発、大洗行きのフェリーに、少女は乗っている。
「この北海道とも、もうお別れね」
少女はそう言いながら、北海道の島を見つめていた。
少女の名前は天道（てんどう）　未来。自称、天の道を往き、未来を掴み取る少女だ。
「どんな所なんだろ、米花町って・・・？」

1．フェリー殺人事件

「何するのよっ！？」
女性は訊ねた。
しかし、相手は問答無用で女性の胸に包丁を突き刺した。
グサッ！――女性の血が辺りに飛び散る。

「見てみてお父さん。本州見えてきたよ！」
そう言って、窓の外を覗き込んだのは、毛利（もうり）　蘭。眠りの名探偵、毛利（もうり）　小五郎の一人娘である。
小五郎は、蘭の言葉にこう言った。
「良かったな。俺は船酔いでもう駄目だ」
と、今にも吐きそうな顔だ。
「ちょっとお父さん、こんな所で吐かないでよ？」
蘭はそう言うと、室内を見回した。
「そう言えばコナン君は？」
「ああ？コナンならさっきトイレに行ったぞ」
と、その時、眼鏡と蝶ネクタイの少年、コナンが血相を変えて戻って来た。
「おじさんっ、大変だよ！」
「ああ、何が大変なんだ？」
「事件だよ！たった今殺人事件があったって！」
「ぬぁにぃっ！？現場は何処だっ！？」
「女子トイレだって。兎に角来てよ！」
「よし分かった！」
コナンと小五郎は、慌ててすっ飛んで行った。
（お父さん、船酔いは？）

コナン達が駆け付けると、女子トイレの前に数人の人集りが出来ていた。
「どいたどいた！」
小五郎はそう言うと、人混みを左右に掻き分けて入って行った。
すると、一人の少女が個室の中で遺体に触れていた。
小五郎はその少女に、歩み寄って拳骨をお見舞いしようとした。
しかし、少女がそれに気付き、小五郎の拳を片手で受け止めると反対の手で小五郎の腹にパンチを喰らわした。
「ぐはっ！」
と、腹を押さえて痛がる小五郎。
「おじさん、証拠隠滅に来てみたら私がいたもんだから思わず殴り掛かったのでしょうけど、甘かったわね」
「バカやろうっ、俺は探偵の毛利　小五郎だ！」
「毛利　小五郎？聞いた事無いわね。それより、一般人は出て行ってくれる？」
少女がそう言うと、コナンが突っ込む様に言った。
「そう言うお姉さんも一般人だよね」
「あら、私の事知らないの？私は高校生探偵の天道　未来よ」
そんな事より髭――未来はそう口にすると、
「アンタも探偵ならそれらしく警察にでも電話しなさい」
と、小五郎を睨む。
「そうだな」
小五郎はそう言うと、携帯を取り出し、１１０番通報をした。

2．目暮警部

小五郎が電話を終えると、チョビ髭の太った男が現れてこう言った。
「おや、毛利君では無いかね？」
聞き覚えのある声に小五郎は、
「もしかして・・・」
と、後ろを振り向いた。
「ぎゃー警部殿、何故此処に！？」
「それはこっちの台詞だよ、毛利君」
「いや、実は娘達と旅行に来てましてね。そんな事より警部殿、事件ですよ事件」
「やれやれ、また君は・・・」
チョビ髭の太った男、目暮　十三はそう言って、溜め息を吐いた。
「所で警部殿は何故こちらに？」
「ああ何、ちょっと道警に呼ばれてな、ってそんな事今はどうでも良い。事件の状況を話してくれ」
その言葉に、待ってましたとばかりに未来が出て来て言った。
「事件は今から３０分程前、この女子トイレで起きました。被害者は茨城県にお住まいの高木（たかぎ）　真理絵さん３０歳。大手企業の社長をしています。
死因は心臓を刺された事によるショック死と見て間違い無いでしょう」
「誰だね君は？」
「あ、申し遅れました。私、北海道で探偵をやっている天道　未来と申します」
その言葉に目暮は、驚いた様に彼女の両肩に手を乗せ、
「おおっ、君が噂の！先程お父さんから話しを聞いたよ！なんでも、工藤君顔負けの推理をするそうじゃないか！」

「買いかぶりすぎですよ。てか親父の事ご存知なんですか？」
「ああ知ってるとも。君のお父さん、道警捜査一課の警部をなさっているそうじゃないか。今日も彼に用事があってな。道警に行って来た所だ」
「それじゃあ、あなたが警視庁の目暮さん？」
「うむ、その通りだ」
「あのさぁ、そんな事してる暇あったら早く事件の捜査をした方が良いんじゃない？」
そう言ったのは、やはりコナンだ。
「おう、そうだった！」
と、手をポンと叩く目暮。
未来はコナンに顔を向けると、
（何この生意気なチビは？）
すると、コナンは未来の視線に気付いた。
「僕の顔に何か付いてる？」
「え、いや、生意気なチビだなって思って」
その言葉にコナンはムッと来た。
（悪かったな！）
「あ、警部さん」
「何だね、天道君？」
「容疑者を洗うなら、殺人を犯して早く逃げようと出入り口付近で開くのを待っている怪しい人物を連れて来て話しを聞いた方が良いでしょう」
その言葉に目暮は、？を頭に浮かべた。
それを悟ったか未来は、
「だって人殺したんだから、早く逃げたいでしょ、ね？」
と、コナンに問う様に軽く顔を向ける未来。
「それもそうだな。
よし毛利君、出入り口付近で扉が開くのを待っている怪しい人物を捜して連れて来てくれ」

「お任せ下さい、警部殿！」
そう言って、小五郎は去って行った。
やれやれ――目暮はそう思いつつ溜め息を吐いた。
「さてと、死体の様子でも拝むとするか」
目暮はそう口にすると、個室の遺体を拝みに行った。
「うーむ、硬直具合いから見て死後１２時間前後か」
目暮は腕時計を見た。
その時、小五郎が慌てて戻って来た。
「警部殿、また殺しです！」

3．第2の殺人

「ぬぁにぃっ、デッキで人が殺されてるっ！？」
目暮は驚いて叫んだ。
「毛利君、大至急案内してくれ！」
目暮はそう言うと、小五郎と共にデッキへ向かった。
「ねぇ、お姉ちゃん」
コナンは未来に声を掛けた。
「お姉ちゃんは行かなくて良いの？」
その問いに未来は、
「行くよ」
そう言って、彼女はデッキに向かった。

辺り一面に広がる海に、側面に太陽のマークが描かれたフェリー、サンフラワーはある。
そのサンフラワーのデッキに、小五郎と目暮、未来、コナンはいた。
目の前には、男性が苦しそうな顔をして倒れており、その横にはジュースの缶とそれが溢れていた。
（この臭い、青酸カリか？）
と、コナンが遺体からする甘酸っぱい臭いを嗅いでいると、
「コルァッ、何やってんだ坊ずっ！？」
ゴチーンッ！――コナンは小五郎の拳骨を喰らい、彼に襟を掴まれ、持ち上げられた。
「餓鬼はすっ込んでろ！」
小五郎はそう言って、コナンを放り投げた。
うわっ！――コナンは床を転がった。
（痛！ったく・・・）

「大丈夫？」
そう言って手を差し伸べたのは未来だった。
「あ、ありがとう」
コナンはそう言うと、未来の手を取って立ち上がった。
（この娘、可愛い・・・）
コナンは頬を赤くした。
「それで、何か気付いた事は？」
「え？」
「さっき、あの人の顔の近くで臭い嗅いでたでしょ？」
と、遺体を指差す未来。
「甘酸っぱい臭いがしたよ。多分、青酸カリじゃないかと思うんだけど・・・」
「ふうん」
未来はそう発すると、遺体に近付き、手袋をはめ、ズボンのポケットを漁った。そこにはお財布、携帯、煙草とライター、免許証が入っていた。
「尾張（おわり）　仁成か。名前の通りになってしまって可哀想だ・・・」
未来は免許証の名前を見ながらそう呟いた。
「財布からお金が抜き取られていないとすると、物取りでは無いな。怨恨か？」
そう言ったのは、財布の中身を確認している小五郎だった。
未来はその彼の方を向いた。
・・・・・・――暫しの沈黙の後、
「コルァ髭、被害者の遺留品に指紋付けないでよ！」
そう言って、未来は小五郎から財布を奪い取った。
「天道君、毛利君はこう見えても有能な名探偵なんだ。多少の事は多目に見てやってくれ」
目暮がそう言うと、未来は疑う様な目で彼をジッと見つめた。
「へぇ、この間抜け面がねぇ」
その言葉に、コナンは思った。

（同感だ）
「まぁ良いわ。兎に角、この船が着いたら、誰もここから降ろさない様に船員に言っておきましょう？」
未来はそう言うと一旦区切り、
「犯人はまだ、この船（なか）にいるのだから」
と、真剣な表情になって言った。

3．第2の殺人（後書き）

尾張　仁成。彼の名前にはこんな意味があります。

「人生終わり」

何故って、「仁成」は「じんせい」と読めるから。

4．一体・・・？

第２の殺人が起こって３０分。船は漸く本州の茨城県、大洗に到着した。
操縦室では、目暮警部が事のあらましを説明していた。
「えっ、船上で人が殺されたっ！？」
「ええ。ですから暫くの間、出入り口を封鎖して頂きたいのですが、よろしいですね？」
「分かりました。そう言う事なら協力しましょう」
船員はそう言うと、マイクのスイッチを入れた。
「お客様にお知らせ致します。当船の扉にトラブルが発生しました。至急、点検を行い、対処致しますので、暫くお待ち下さい」
その放送を客室で聞いていた黒尽く目の二人、ジンとウォッカは、ちっと舌打ちをした。
「どうやら見付かったらしいな。奴が殺った二つの死体が」
「だとしたら、俺達は早く此処から」
「今の放送聞いたろ？無理だ。俺達は今、この船（なか）に閉じ込められているんだからな」
ジンはそう言うと、煙草を一本、口にくわえて火を点けた。
「何、安心しろ。もし奴が俺達の事をばらそうとでもしたら・・・」
と、拳銃を見せるジン。

乗客は目暮によって食堂に集められた。ざっと見て、数百人って所か。
「しっかし多いですなぁ。本当にこの人数のアリバイを聞くんですか？」
そう目暮に聞いたのは、小五郎だった。彼は食堂に集まった人数を見て驚いている。

「当然だ。事件が起きたんだからな」

ガチャン――未来は被害者の高木の部屋にやって来た。
（何か手掛りはあるかしら？）
と、その時、コナンが入って来た。彼もまた、未来と同様に手掛りを捜しに来たのだ。
「あら坊や、探偵ごっこ？」
と、コナンを見下ろした。
（何でいるんだよ？）
コナンは自分を見下ろす未来にそう思った。
「ねぇ、坊やの名前は？」
「江戸川　コナン。探偵さ」
うーん――未来はコナンを真剣に見つめて唸ると、
「それ、偽名？」
ギクッ！――コナンはその言葉に驚いた。
「い、嫌だなお姉ちゃん。偽名な訳、無い・・・よ？」
コナンがそう言うと、未来が彼の首に触れた。
（嘘吐き）
未来はそう思った。
（こいつ、まさかっ！？）
コナンは焦った。かつて、水無　怜奈が彼に取った行動と同じだったからだ。
（こいつ、一体・・・？）
「あっ、いけない。こんな事してる場合じゃなかった」
未来はそう言うと、慌てて室内を物色し始めた。
「ボッとしてないでコナン君も手伝って！被害者二人の関係を見付けるのよ！」

4．一体・・・？（後書き）

水無　怜奈とどんな関係が？
そんなの無いです。否、厳密に言えば関係無い訳では無いんですが・・・。兎に角、今は言えないです。

5．４人の容疑者

事件発生から数時間。乗客の事情聴取も終わり、４人の容疑者が浮かんだ。

その４人の容疑者は、川瀬（かわせ）　涼子、北島（きたじま）　治男、香田（こうだ）　美香、篠山（ささやま）　光一。何れも、被害者とは面識のある人物である。

「お前達が此処に残された理由は分かるな？」

小五郎はそう言うと、

「そう、それはお前達が殺人事件の容疑者だからだ！」

と、叫んだ。

「じょ、冗談じゃねぇ！」

そう言ったのは、エンジ色の長い髪の篠山だ。

「そうよ、私達は何もしてないわ」

と、小五郎好みの川瀬。

「私達？」

「確かあなた方は初対面の筈じゃ？」

小五郎の言葉に、川瀬は慌てて口を押さえた。

「初対面じゃ無いわよ」

そう言って現れたのは、未来だった。

「どう言う事だね？」

すると未来は、一枚の写真を取り出した。その写真には、殺された高木、尾張の他に、川瀬、北島、香田、篠山の４人が写っていた。

「あなた方が初対面なら、どうしてこの写真にあなた方６人が写っているんでしょうか？」

・・・・・・――数秒の沈黙の後、未来はこう言った。

「それは、あなた方６人が水利大学（みずとしだいがく）の同級生だから。違いますか？」

その言葉に、ピンクの髪に眼鏡を掛けた如何程（いかにも）萌えっ娘と言う感じの女性、香田はこう言った。

「やはり隠し事はいけませんね。

あなたの言う通り、私達は大学の同級生です」
「で、その俺達が事件と何の関係があるんだ？」
そう言ったのは、香田の後ろで煙草に火を着けている長身の北島だ。
「４人ともアリバイが無いんですよ」
「そんな事で俺達を容疑者扱いか。て言うかあんた誰だ？」
と、小五郎を睨む様に見つめる篠山。
「ほぉ、この俺を知らないとは」
小五郎はそう言うと、名刺を出して渡した。
「私はこう言う者です」
篠山は名刺を受け取って見ると、
「毛利　小五郎」
と、読みあげた。
「お前ら知ってるか？」
篠山は、川瀬、北島、香田の３人にそう訊ねた、が、３人とも首を横に振った。
「眠りの小五郎って言えば解るんじゃない？」
と、未来の後ろから顔を出すコナン。
「何、眠りの小五郎っ！？」
そう驚く篠山の声と共に、３人は慌てふためいた。
「そ、それで、何でアリバイが無いだけで俺達が容疑者扱いなんです？」
「否、容疑者と言う事ではなく、事件の参考人として一応話しを聞いておこうと思いまして・・・」
と、目暮が訂正する様に言った。
「それじゃあ、最初の被害者、高木さんについてお話しを伺いましょう」
小五郎がそう言うと、眼鏡っ娘の香田が答えた。
「真理絵さんは、誰に対しても優しく接してました。とても素直な娘で、誰の言う事でもホイホイ聞く方です。恨まれる様な所はあり

ません」
成る程――目暮はそう言うと、
「これは怨恨では無く、発作的なものだな」
と、付け足した。
「あのぉ、言い忘れてましたけど、被害者の死亡推定時刻、今日のＡＭ：３：００頃なんです。その時、あなた方は何してました？」
突然、未来は訊ねた。
「その時間なら、俺達寝てたぜ」
北島は煙草を吹かして言った。
その北島に未来は、
「それじゃあ証明にはならないわよ？」
と、問う様に言った。
「それはどうしてですか？」
と、香田。
「だって、皆寝てたら、誰かが起きて出て行っても、分からないよね？」
そう言ったのは、コナンだった。
未来は横目でコナンを見ると、
（この餓鬼、何者かしら？）
あっ！――川瀬は思い出したかの様に発した。
「そう言えば、その時間、北島君がいなかったわ。私、トイレに起きたからよく覚えてるわ」
「トイレ？」
「ええ、客室に付いてるのを」
すると、皆が北島を向いた。
「ま、待て。俺が殺したって言うのかよ？」

5．４人の容疑者（後書き）

「天の道を往き、未来を掴み取る少女」
はい、カブトのオマージュです。

6．疑われし4人

「北島さん、あなたは被害者が殺された時間、どちらに？」
未来は真剣な表情で北島に訊ねた、が、答えようとはしなかった。
「北島さん、あなたが犯人でないのなら、何処で何をしていたのか教えて下さい」
それとも――と、未来は続ける。
「答えられない理由があるのですか？」
「否、そう言う訳じゃない。だが、今は答えたく無い」
「そうですか。
では、尾張さんの時・・・」
未来は途中まで言うと、口を閉ざした。
死亡推定時刻が分からないのだ。これでは話しの聞き様が無い。
未来はしゃがむと、コナンの耳元で囁いた。
「尾張さんの死亡推定時刻って分かる？」
「ＰＭ　１：００頃だよ」
「アリガト」
未来はそう言うと、立ち上がって問う。
「北島さん、尾張さんが亡くなったのが午後一時頃なんですが、その時あなたはどちらに？」
「その時か。その時、俺は部屋にいたぞ」
「それを証明する人は？」
その言葉に、香田が言った。
「その時間、北島君は私と一緒の部屋にいました。尾張君を殺す事など、彼には出来ないと思います」
うーむ――目暮は唸った。
コナンは、顎に手を当て、
「しかし、彼の死因は毒物によるものだ。現場にいなくてもジュースに毒を仕込んでおけば殺害は出来る」

・・・・・・――一瞬の沈黙の中、小五郎が破る様に、
「コルァ、コナン！事件に首を突っ込むな！」
と、コナンに拳骨を繰り出す、が、未来がすかさず小五郎の拳を掴んだ。
「落ち着け髭」
「髭じゃないっ、毛利　小五郎だ！」
「どうでも良いよそんな事。
兎に角、尾張さんの死因が毒物である以上、あなた方４人なら誰にでも殺害出来るわ！」
すると４人は驚き、
「４人って」
と、篠山が発し、
「そんなっ！？」
と、川瀬。
そして、最後に香田が、
「私達を疑ってるのですか？」
「ええ、疑ってます」
と、未来は躊躇う様子も無くストレートに言った。
「所で、４人が尾張さんを最後に見たのは何時頃ですか？」
「それなら多分、食事の時だと思います」
自信無さげにそう言ったのは、川瀬だった。
「ああ、確かその時だ。高木を除けば、俺達全員いたからな」
そう言って、煙草をくわえる北島。
「そんでその後、尾張がなかなか来ない高木を捜しに行ったんだ」
と、篠山が続いて言う。
「その時、彼は何かを持って行きましたか？」
その問いに、香田が答える。
「缶のジュースを持って行きましたわ」
成る程――と、顎に手を当てる未来。
「と言う事は、予め缶の口に毒を塗っておけば、離れていても殺害

は可能って事ね」
（しかし、犯人は一体誰なの？）
と、その時、
「解ったぁっ、犯人はアンタだ！」
と、小五郎が叫び、北島を指差した。
（へっ！？）
（えっ！？）
未来とコナンは、驚きながら小五郎に目を向けた。
「面白い、聞かせてくれよ？」
北島はそう言うと、携帯灰皿を出し、火を消すとそこに吸い殻を入れた。

7．小五郎の間違った推理

「では真相をお話ししましょう」
小五郎はそう言うと、自分の推理を自信に満ちた表情で語り始めた。
「北島さん、あなたは高木さんを予め女子トイレに呼び出しておき、犯行時刻になったらそこへ行き、彼女の胸を包丁で突き刺して殺害。そして、それを偶然見てしまった尾張さんを口止の為に毒殺したんだ」
その推理に未来、コナンの二人は、
（口止に毒って・・・）
（有り得ねえよ、おい）
「ふっ、面白い推理だ、が、俺は殺っちゃいねえし、証拠も無い。俺を犯人呼ばわりしたけりゃ証拠を持って来い、証拠を」
北島はそう言うと、
「付き合ってらんねえな！」
そう残して去って行った。
（あの人はシロだな）
そう思った未来は、食堂を跡にした。
コナンはそれを不審に思い、後を付けた。

「ねぇ、この船に運動出来る所ある？」
未来はインフォメーションセンターの女性に訊ねた。
「卓球でしたら、出来る所があります」
と、女性は傍の階段を示した。
「あちらを降りて頂いて、右へ行くと卓球が出来る部屋があります」
ありがとう！――未来はそう言うと、その階段を降りて行った。

コツ、コン、コツ、コン――と、ラケットでピンポン玉を打つ音が響く部屋に、未来はやって来た。
（やってるやってる）
未来はそう思いつつ、休憩をしてる外国人男性に目を付け、声を掛けた。
「この女性見た事無い？」
と、高木が写った写真を見せた。
「Ｗｈａｔ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｓａｙ？」
（あ、英語・・・？私英語全然駄目よ。何て言えば良いの？）
そう思っていると、後を付けて来たコナンが助け舟を出した。
「Ｄｉｄ　ｎｏｔ　ｗａｔｃｈ　ｔｈｉｓ　ｗｏｍａｎ？」
「Ｏｈ，　ｌｏｏｋｅｄ！」
「Ｗｈｅｎ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｌｏｏｋ？」
「Ａｔ　ａｂｏｕｔ　９：３０　ａｍ」
「Ｒｅａｌｌｙ！？」
コナンは驚く様に言った。
「どうしたの？」
「今朝の９：３０頃に見た、って・・・」
（ああ、そう言う事）
そう思った未来は、高木が発見された現場へと向かった。
待ってお姉ちゃん！――と、コナンも駆け出した。

現場に来た未来は、ガサゴソとゴミ箱を漁り始めた。
（あった！）
と、ゴミ箱から何かを包んだ様な新聞紙を取り出し、それを広げた。そこには、大量の血が付着した包丁があった。

8．未来の推理

未来は食堂に、新聞にくるまれた血染めの包丁を持ってやって来た。
「警部さん、これを」
そう言って、未来は新聞にくるまれた血染めの包丁を渡した。
何だねこれは？――警部はそう言うと、新聞を開いた。
「これはっ！？」
と、驚く目暮に、未来が言う。
「高木さんを殺害する時に使用された凶器です。現場のゴミ箱で発見しました」
「ちょっと待て。現場のゴミ箱はさっき調べたが、何も無かったぞ？」
「その時は、犯人がまだ持っていたんですよ」
「じゃあこう言う事かね？我々がデッキに向かった後、犯人がそこに入れた、と？」
未来は頷き、
「そう言う事になります」
「そうか。で、犯人は誰なんだね？」
「では、大至急北島さんを呼んで来て下さい」
すると目暮は、小五郎にこう言った。
「毛利君、大至急北島さんを連れて来てくれ」
「了解しました、警部殿」
小五郎はそう言うと、食堂を跡にした。
それから暫くして、小五郎が北島を連れて戻って来た。
「皆さん、事件の真相が解りました。
高木さんを殺害したのは、尾張　仁成さんです」
そう言った瞬間、食堂内は慌ただしくなった。
「先ず、第一の犯行ですが、あれは朝食の時に行われました」

「えっ、どう言う事？真理絵は夜中に殺されたんじゃないの？」
「いえ、朝食のあった９：３０頃、高木さんが目撃されています」
どう言う事？――全員、そんな顔をした。
「高木さんは卓球をやってたんですよ。
人間、運動を行った直後に亡くなると、死亡推定時刻が大幅にずれます。高木さんはこの状態の時に殺害されたのです」
「じゃあ、尾張は誰に殺されたんだ？」
と、北島が煙草を吸いながら聞いた。
「えっ、いや、それはえーと・・・」
未来は言葉につまった。
「何だ、答えられねえのか？」
パシュッ！――コナンの腕時計から麻酔針が発射された。
「服毒自殺よ」
未来がそう言った瞬間、コナンの放った麻酔針が彼女の首筋にチクッと刺さった。
えっ？――未来は首筋に触れた。
（何で針が？）
と、その時、強力な睡魔が彼女を襲った。
そして、何かに誘われるかの様に、偶然傍にあった椅子に腰掛けた。
「と言うのは、全て犯人のシナリオ。真犯人はあなたです、香田さん！」
コナンは未来の背後に素早く隠れ、蝶ネクタイのダイヤルを合わせてそう言った。
「ちょっ、ちょっと待って下さい。どうして私が犯人なんですか？」
「香田さん、あなたは尾張さんに交換殺人を持ち掛けられたのではないですか？」
交換殺人？――と、首を傾げる目暮。
「全てのシナリオは、尾張さんの殺害したい人を香田さんが殺害し、逆に香田さんの殺害したい人を殺害する、筈だった。しかし、此処

で予定が変わり、前もって用意していた毒で、尾張さん殺害した」
予定？――目暮は訊ねた。
「そう・・・尾張さんは北島さんを殺す様、香田さんに言ったのです」
「それを理由に私が尾張くんを殺害したって言うんですか？」
「コナン君、例の物を」
　すると、コナンが未来の背後から姿を見せ、目暮に一枚の写真を渡した。
「観ての通り、その写真は北島さんと香田さんのツーショットです。恐らく、二人は交際しているのでは？」
「けどよ、交際と殺人は関係無いんじゃないのか？」
　そう言ったのは、小五郎だった。
「あるんですよ」
「おっ、そうか。香田さんは北島さんに交換殺人の事を相談したんだ」
　と、目暮は手を叩いて言った。
「その通り・・・。だから、香田さんは青酸カリを用意し、尾張さんに服毒させたのです」
「しかし、その毒は何処で手に入れたんだね？」
「水利大学です。そうですよね、北島さん？」

9．毒の入手経路

「そうですよね、北島さん？」
コナンは未来の声でそう聞いた。
しかし北島は、ふう、と煙を吐き、
「何の事だかサッパリだぜ」
「水利大学総合医学部・・・北島さん、入ってますよね？」
「た、確かに入ってる。だが、それと事件とは全く関係無いだろ？」
「関係大有りですよ。一週間前にそこで、青酸カリが一瓶、盗まれているんですからね」
すると目暮は、
「そう言えば一昨日の日売新聞に載ってたな。『水利大学、青酸カリ盗まれ』って」
「そう、その青酸カリを盗み、香田さんに渡したのが、北島さんなんです。そうですよね、香田さん？」
「しっ、知らないわそんな事！第一、青酸カリの瓶なんて見付かって無いじゃない！」
コナン君――未来が呼ぶと、
「はーい」
コナンは返事をし、目暮に何かをくるんだハンカチを渡した。
目暮はそのハンカチを広げ、確認した。
「それは先程、コナン君が尾張さんの部屋で見付けた瓶です。側面にはシアン化カリウムと書かれています」
確かに――と、目暮はその瓶を目を凝らして見つめる。
「ちょっと待って。その瓶が何だって言うの？それに、尾張君が自分で持って来たのかもしれないわ」
「それはありませんよ。何故なら、あなたの指紋がその瓶から検出されたからです」
「何を言ってるの？私はちゃんと拭き取っ・・・」

香田は慌てて口を押さえた。
「墓穴を掘りましたね、香田さん。
因みに、その瓶の指紋はまだ調べていません」
「卑怯ですよ！嘘を吐くだなんて！」
香田は怒った。
「それは申し訳ない。しかし、あなたがボロを出したのは事実。全部話して貰いますよ」
未来がそう言うと、暫しの静寂が訪れ、それを破るかの様に香田が口を開いた。
「尾張(あいつ)が悪いんです。尾張(あいつ)が交換殺人を持ち掛けなければ、私は殺さなかった」
「やはり、動機はそれですか」
「それだけじゃないです」
えっ？――コナンは頭に？を浮かべた。
「尾張君、組織を抜けようとしたのよ。真理絵だってそう。それに、もし組織の事をバラされたら・・・」
（何っ、組織だとっ！？）
と、その時、香田の額に穴が開き、彼女は倒れた。即死だった。
「なっ、何が起こったんだね！？」
そう言って、目暮は香田に駆け寄った。しかし、返事は無い。
コナンは、慌てて食堂を飛び出した。
（組織って、奴らの事か！？）

10．ベルモット

とある部屋。ウォッカは寛いでいた。
「兄貴、何処行っちまったんだ？」
彼がそう口にすると、部屋のドアが開き、ジンが入って来た。
「兄貴、今まで何処に？」
「香田と言う女が組織（おれら）の事を喋りそうだったんで、こいつでこめかみを一発な」
と、愛用のベレッタを取り出す。
「それより荷物をまとめろ。ずらかるぞ」
ジンはそう言って、部屋を出た。すると・・・。

コナンが船内を駆け回っていると、客室の扉が突然開き、ジンが出てきた。
！？――コナンは急停止。驚き、恐怖した。
（じ、ジン・・・）
コナンは彼を睨み付けた。
ん？――ジンはコナンに気付いた。
「お前は確か、ＦＢＩ（やつら）と釣るんでいる餓鬼だな」
そう言って、ジンはコナンに近付いた。
やばいっ、殺される！？――コナンはそう思った。
「お前、ちょっと来い」
ジンは鋭い目付きでそう言い、コナンの服の襟を掴み持ち上げた。
「お、俺を殺すのか？」
しかし、ジンは答えなかった。
（畜生！麻酔針はさっき使っちまったし、どうすば・・・？）
その時、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「ジン、その子を放して頂戴」

その言葉に、彼は振り向いた。
「ベ、ベルモット！？」
ジンは驚いた。
「何故お前が此処にいる？」
「あら、此の間言わなかったかしら？暇潰しに旅行へ行くって」
そう言った後、ベルモットはコナンを放す様、ジンに言った。
「何故だベルモット？こいつはＦＢＩと釣るんでいる餓鬼だぞ？」
「良いから、私に任せて頂戴」
ベルモットはそう言って、不気味に微笑んだ。
「貴様、何か企んで・・・？」
「誤解しないで？彼にはＦＢＩについて色々聞きたい事があるのよ」
「フッ、ならさっさと済ませて始末しとけ」
俺はずらかる――ジンはそう言うと、荷物をまとめて出て来たウォッカと共に去って行った。
「貴方、工藤　新一でしょ？」
なっ！？――コナンは驚いた。
「シェリー・・・否、志保さんから全部聞いたわ」
「ど、どう言う事だ・・・？」
「あ、流石にこれじゃあ抵抗あるよね」
ベルモットはそう言って、自分の首に手を当て、覆面を外す様にベルモットマスクを外した。その下からは、未来の顔が現れた。
なっ！？――コナンは更に驚き、混乱した。
「あのさ、混乱してる所悪いんだけど、これ返すよ」
未来はそう言って、麻酔針を取り出した。
「なっ、何で・・・何で探偵のあんたが？」
コナンは不思議そうな顔でそう聞いた。
うーん――未来は唸ると、
「話してあげよっか？何もかも」
「ああ・・・」
「オッケー、全部話すよ。一回しか言わないから、よく聞いてね？」

うん――コナンは頷いた。
「私のお袋、ＣＩＡの諜報員だったんだけど、組織（やつら）にバレて殺されたの。だから、私は仇を取るのに変装して組織に潜り込んだ。内側から潰す為、ベルモットとしてね」
此処までは良いね？――と、未来はコナンを見つめる。
「貴方の事知ったのはその後よ」
しかし、コナンはチンプンカンプン。
「あら、内容が突拍子無さ過ぎて理解出来なかったかしら？」
「そ、その話しが事実なら、４２巻の黒の組織と真っ向勝負で撃った足、どっちの足か言えるよな？」
「左足だったかしら？」
そう言って、未来はズボンを下げた。すると、左足に大きな傷跡が見えた。
「ち、ちょっとズボン脱ぐな！」
と、コナン顔を赤くし、咄嗟に手で目を隠した。
「隠すならちゃんと隠せ。指と指の間から堂々と見てんじゃねえよチビが」
未来はそう言って、コナンの頭に右足を載せ、軽く体重を掛けた。
「お、重い・・・」
プチッ！――その瞬間、未来はキレた。
「糞餓鬼が！誰が重いだと、あぁ！？」
そう言って、更に体重を掛けた。
その時、未来は背後から殺気を感じた。
「コナン君を・・・いじめるなぁ！」
そう言って、回し蹴りを放ったのは蘭だった、が、未来はそれに気付いたらしく、
「甘い！」
そう言って、しゃがんで避けた。
えっ？――蘭は目を点にした。
「誰だか知らないけど私を襲うのは１００万年早いわ！」

未来はスッと立ち上がり、カウンターを繰り出した。
ガンッ！――未来の回し蹴りが蘭の頭にクリティカルヒット。蘭は呆気無く倒された。
蘭姉ちゃん！？――コナンは慌てて駆け寄った。しかし、蘭は白眼を剥いて気絶していた。
「あっ、ひょっとしてこのトンガリ頭、貴方の知り合い？」
うん――と、コナンは頷いた。

１０．ベルモット（後書き）

蘭が一撃で気絶するのって、未来は何者？

11．米花町

工藤邸の隣。阿笠邸とは逆の家に、引越屋のトラックが停車している。
どうやら、荷物を家の中に運んでいるらしい。
塀の表札には、天道、と書かれてある。
その頃、阿笠邸内では、コナンと灰原が話しをしていた。
「灰原、お前あいつと面識あるんだってな？」
コナンはそう言って、工藤邸の隣で業者に命令している未来を示した。
「まぁね・・・。面識あるって言っても、ベルモットの時だけ。彼女の素顔を見るのは初めてよ。組織（あっち）では、行動が殆んど制限されていたから」
「そうか。て言うか、どうでも良いけど、何で隠れるんだ？」
「苦手なのよ、あの人・・・」
「何で？」
その問いに、未来がやって来て答えた。
「弱味握られてるからなのよねぇ？」
弱味？――コナンは教えて欲しそうな顔をした。
「志保さん、中学の時まで・・・」
未来が言い掛けると、灰原は慌てて彼女の口手を当てて封じた。
「そ、そそそ、そんな事彼に言わないで頂戴！」
灰原は顔を赤くした。その横で、未来は携帯の操作音を鳴らし、スッとコナンの前に出した。
「へぇ～、灰原って中学の時までオネショしてたのか」
こりゃ良い事知った――と、コナンはニヤ付いた。
「そ、そう言う工藤君だって・・・」
そう言い掛けると、
（彼に弱味ってあったかしら？）

と、灰原は思った。
「それはそうと、そろそろ二人共学校行かないと？」
「やべぇっ、遅刻だ！」
コナンは時計を見て言うと、灰原を連れて慌てて去って行った。
さてと――未来は後ろを振り返り、トラックの前まで行った。
「運び込みご苦労様」
「それではお代の方を・・・」
すると、未来は一枚の写真を見せた。そこには、若い男女が写っている。
「不倫の事、奥さんにバラすよ？」
「はい？」
無料（タダ）にして？――と、微笑んだ。
「せっ、先輩！」
業者はそう叫び、もう一人の業者を呼んだ。
「この娘が無料にしてくれ、と・・・」
「お客さん、無理言っちゃいけないよ」
業者Bがそう言うと、未来は耳元でこう囁いた。
「北海道の連続通り魔、貴方が犯人だって事知ってるわよ。どうする？」
「きっ、貴様！」
殺してやる！――そう言って、業者Bは未来の首を絞めた。
「先輩、スタンガン」
業者Aは、未来が持ってるそれを指差した。
殺すぞてめぇ！――未来はそう言いたげな顔でスタンガンを見せ付けた。
「すいませんでした！」
業者Bはそう言って、トラックに乗り込んだ。
「先輩、お代は？」
「いや、今回は・・・無料で・・・」
業者Bは酷く脅えた様子で言った。

上には上がいるんだな――そう思う業者Ｂであった。

12．帝丹高校

帝丹高校2年B組の教室では、生徒達が何やら騒いでいた。
そんな中、一人だけ浮かない顔をしている女子生徒がいる。蘭だ・・・。
「ねぇ、蘭。今日さ、転校生が来るんだって」
そう言って来たのは、親友の鈴木　園子だった。
園子は、妄想に浸った。
「一体どんな子だろ？やっぱりイケメンかしら？」
しかし、蘭は無反応だった。
「どうしたの？転校生が来るのよ？気にならないの？」
「女の子よ。実はこの間会ってるのよねぇ・・・」
はぁ――と、溜め息。
「えっ・・・蘭、会った事あるの？」
「うん。この間、北海道から帰って来る時ね」
「それで、その子はどんな子なの！？」
「一言で言えば酷い奴よ。コナン君の事いじめてたし、私なんか殺され掛けたのよ！」
蘭が怒った様にそう言うと、彼女はいきなり髪を後ろに引っ張られた。
「それはあんたがいきなり蹴って来るからだろ？」
そう言ったのは、未来だった。
「あんた誰？」
園子がそう訊ねると、未来はこう言った。
「今日からこの学校に通う事になった天道　未来よ。宜しく」
そう言って、園子に握手を求めた。
「鈴木　園子よ。こちらこそ宜しくね」
と、握手をする園子。
だが、園子の握った手は、ポロッと取れて、

キャアァーッ！――園子は悲鳴をあげてしまった。
「引っ掛かった！」
未来はそう言って、袖から手を出した。
「なんだ、冗談か。心臓止まるかと思ったわよ」
園子はホッとして胸に手を当てた。
「じゃあ、私、職員室行ってくるね」
未来はそう言うと、蘭を睨み付けた。
「当然、あなたも来るよね？」
えっ？――蘭は目を点にした。
「私、学校の事良く知らないから、案内してよ？」
「い、嫌です・・・」
あっさり断った。すると、
「あなた、小学校の時に体育館の倉庫に閉じ込められて工藤君以外誰にも気付いてくれなかったそうじゃない。この事バラされたく無いでしょ？」
未来は蘭の耳元でそう言った。
「なっ、何で知ってるのよ？」
「くど・・・否、コナン君から聞いたのよ」
（コナン君、何で喋っちゃうの？）
「兎に角、校舎の案内宜しくね」
そう言って、未来は蘭を引きずって行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8728b/

名探偵コナン new

2010年10月28日08時32分発行